

torico-Doctrinal Study of the Commentary on the Metaphysics, 1972) がこの問題をかかなり尖鋭な形で提起し、あらたな論争の口火をきっている。エルダース神父は、この場合の存在 (esse) は事物の実在性 (reality), つまり事物の全体がそこにふくまれるが、存在の現実性をまっぴらで成立しているところの実在性の意味にとるべきことを主張する。そのことによって、判断が存在に関わることを主張する初期のテキストと、存在には触れず、判断において知性は実在にたいする自らの合致を認識することを強調する後期のテキストとを調和させることが可能になるというのである。ここでも前述した著者の方法論的立場があきらかに認められる。

結論的にいって、本書は EBT に関するこれまでの研究の批判的概観を提供してくれるにとどまらず、EBT をあらたに研究しようとする者が決して無視することのできない豊富な資料や有益な刺激を与えてくれる、すぐれた研究書であるといえよう。

ROBERT PRICE: William of Ockham and Suppositio Personalis.

Franciscan Studies (The Franciscan Institute, New York),
vol. 30, annual VIII, 1970, pp. 131-140.

JOHN SWINIARSKI: A New Presentation of Ockham's Theory of Supposition with an Evaluation of Some Contemporary Criticisms.

Idem, pp. 181-217.

水 田 英 実

最近 (1970年), 雑誌 *Franciscan Studies* はオッカムのスポジチオ論に関する研究論文を同時に二つ掲載した。前者はその標題の通りスポジチオ論のうち *suppositio personalis* に照準を合わせたものである。後者もこれを課題の一つにしている。

ところでこういう新しい試みを可能にしたのは発表者自身も認めているように、一つは現代の論理学の発達であり、もう一つは先に同誌上に発表されたオッカムの(ものと目される)論理学書のテキストである。Eligius Buytaert が同誌24号(1964年)34-100頁に *Tractatus Minor* の批判版を、25号(1965年)151-276頁と26号(1966年)66-173頁にかけて *Elementarium Logicae* の批判版を載せている。

Price は、現代論理学を基準にして強いて分ければオッカムのスポジチオ論は意味論であるという(この見方に従って、supponere pro の訳語の stand for が文中しばしば躊躇なく denote と言い換えられる)。しかし定言的言明の解釈を通して展開されたこの理論は、実は伝統的定言命題の中に明瞭に現われない構文に対しても十分に機能を発揮しうるものであった。ここからこの論理が現代の量化理論の先鞭をつける(つけえた)とみることが出来る。こういう見解を裏づけるために四種の定言命題が次のように定義され、表記しなおされる。

All S is P=df (s) (Ep) (s=p)

Some S is P=df (Es) (Ep) (s=p)

Some S is not P=df (Es) (p) (s≠p)

No S is P=df (s) (p) (s≠p)

かなり複雑であるけれども量記号と同一性またはその否定を用いて上のように定義すれば一定の条件のもとに定言命題の真理条件を同一性の真理条件に還元することが出来る。たとえば全称肯定命題 'All S is P' は $[(s^1=p^1) \vee (s^1=p^2) \vee \dots] \& [(s^2=p^1) \vee (s^2=p^2) \vee \dots] \& \dots$ が真ならばそのときに限り真である。

Price はオッカム自身にもこれと同様の構文法がありえたと想定する。無論オッカムの論理学において構文法は未発達で、ラテン語の文法の域を充分に脱し切れなかったとも言えるわけであるけれども、かえってその不備を補うべく徹底した意味論が展開された。suppositio personalis の理論がまさにそういう局面を開閉するための方策であったとみて発表者は suppositio personalis の下位分類について興味深い考察を展開する。ただし議論の対象は予め二つの肯定命題に限られる。そして特に注目されるのは suppositio communis の三つの下位分類である。この種のスポジチオを持つのは命題中の(共義語も含めた)普通名辞である。まず特称命題中の名辞は次の条件のもとに suppositio determinata を持つ。'Some S' in 'Some S is P'

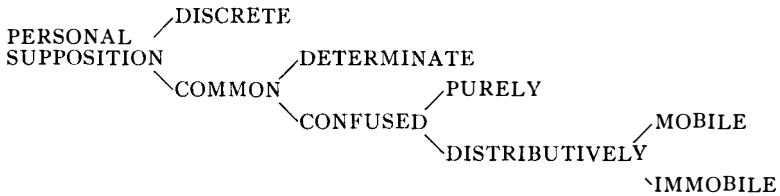
is in determinate supposition if and only if 'Some S is P' is true if and only if some sentence of the form 'X is P' is true where 'X' is a term inferior to 'S' ('Some S?'). 話し手の意志の問題は端折ることにして、次に全称肯定命題中の名辞が *suppositio confusa distributiva* を持つ。'All S' in 'All S is P' is in distributive supposition if and only if 'All S is P' is true if and only if all sentences of the form 'X is P' are true where 'X' is a term inferior to 'S'. ところがここで特称肯定命題において問題にならなかった、量化された兩名辞の還元の順序が問題になる。全称肯定命題において '(s) (Ep) (s=p)' と '(Ep) (s) (s=p)' は等値でないからである（いうまでもないが、'X is P' のかたちに還元されれば全称特称いずれの場合も 'P' は *suppositio determinata* を持つ）。そこでオッカムは新たに *suppositio confusa tantum* という意味論的範疇を設けた。実際的にはこれによって還元順序が決定される。たとえば 'Every man is an animal' は 'Every man is either this animal or that (and so on for every animal)' に還元される。オッカム自身はこれ以上還元していないけれども、この中に *suppositio distributiva* を持つ名辞が含まれているから更に還元すれば、'This man is either this animal or that... and that man is either this animal or that ...' となる。

オッカムが彼のスポジチオ論に工夫を凝らして解決しようとしたと思われるこの量記号の順序の違いは現代の量理論において圧倒的重要性を持つ。しかし主語一述語という構文において差異がないため当時の伝統的論理学はこの区別に気付かない。'(Ep) (s) (s=p)' は考察の対象とならなかったのである。これに対しオッカムは *Summa Logicae* 以後ますますスポジチオ論を重視する傾向にある。ここから Price は、もし *Elementarium* における *suppositio confusa* の理論から構文論をも発展させていたなら、その後の論理学史はいわゆる周延則しか今日に伝えなかったものとは違っていただかも知れないとも言う。なお Boehner や Moody が出した問題に対しては「オッカムは *sorted individuals* を量化する。つまり変項の値域は単に個体でなく種別化された個体である。というよりスポジチオに最もよく対応する構文論的装置が、この型の量化である」と答え、名辞を量化するという説も斥けている。

ところで Price は否定命題を *Summa Logicae* に範をとって議論の対象から外し

たとき、この除外が必ずしも *Elementarium* におけるオッカムの趣旨に添わないことを注記した (134頁)。この点に関する満足のゆく説明はない。だからオッカムの *suppositio personalis* の理論に対して量化理論 (同一性論理学も含めて) の立場で意味論的観点に立って高い評価を与えることに異存はないにしても、果してそれがオッカム自身の意図に合うかどうか頷けないところは残る。

後の方の論文はこの点甚だ慎重である。§1の後半で *Summa Logicae* に基づいてオッカムのスポジチオ論全般の概略を示した後、特に *suppositio personalis* を取り上げて論じ、次の表を得る。



さて全称肯定命題 (A-命題) の述語が *suppositio confusa tantum* を持つという考えは歴史的にいうとシャーウッドのウィリアムに倣ったものであり、*suppositio simplex* を持つとしたペトルス・ヒスパヌスとは立場を異にしている。13世紀の先駆的論理学者たちのスポジチオ論との比較は §3 で詳論される。因にそこでは上の二人に加えて、A-命題の述語が *suppositio determinata* を持つとしたロジャー・ベーコンをあげるけれどもオセールのランベールには一言も触れていない。

前掲の Price の論文に従えば上に述べたように *suppositio confusa tantum* は A-命題の還元の順序を決めるとされ、第一段階で述語が、第二段階で主語が分析されると考えられた。Swinarski は第一段階でとどめるべきだとする。つまりこのスポジチオの特徴は述語の選立にあり、命題の選立への還元は *suppositio determinata* の特徴である。そしてここにベーコンとの相違を求めうという。二つの論文が強調の置きどころを異にしていることは明らかである。前者が構文論的装置の導入に苦心するのに対し、後者は *Tractatus Minor* と *Elementarium Logicae* のテキストの研究に相当の頁を費す (§2) ことから分かるように、あくまでオッカムのテキストに基づいて理解することに力点を置く。ここから Geach や Kneale 夫妻への評価・批判も生まれる (§4)。

Tractatus Minor ではオッカムは purely confused supposition を説明するために述語の選立という考えを用いない。果してオッカムがこの考えを捨てる積りでいたかどうか測り兼ねるにしても、この考えを導入するとスポジチオ論そのものに混乱を招くということに気付いたとは充分に考えられる。ところでもし *Elementarium* の方が後で書かれたとすればオッカムは結局述語の選立という考えを捨てなかったのである。それどころか当時多くの論理学者が認めていた他の二つの場合を、A-命題の述語だけがこのスポジチオを持つとする自説の方に引き寄せている。第一は排他命題の主語であるけれども、オッカムは排他命題と A-命題が論理的に等値であるとみて、排他命題の主語が A-命題の述語として現われることを示す（たとえば ‘tantum homo currit’ と ‘omne currens est homo’）。もう一つは広義においてこのスポジチオを持つといわれる場合である。これに対しては、たとえば ‘I promise you a horse’ は、仮に馬が三頭 (A, B, C) だけいるとすると、‘I promise you A or B or C’ と等値になるという。この分析は A-命題の述語に施されるものに極めて近い。

オッカムの suppositio confusa の理論に関する現代の批判的研究家として Geach (*Reference and Generality*, 1962) が取り上げられる (§4)。そしてその分析規則の先在性をめぐる論議に対して、Swiniarski は O-命題に関する論理的下降が主語から始めることは出来ても述語から始めることは出来ない (impurely confused supposition なるものは成立たない) ということを示し、従ってもし分析を主語から始めるという規則が先在するなら、A-命題の述語に固有な suppositio confusa tantum も無用になる (determinata で足りる) とした。ここから Geach がいわばオッカムにオッカムの剃刀をあてたことになると評価する。

他の論点について。Kneale 夫妻 (*The Development of Logic*, 1962) がオッカムの suppositio personalis の理論ひいてはスポジチオ論そのものを不当に低く評価したのは彼らがオッカムのいう論理的下降を誤解したからである (§4)。Swiniarski は Moody を引合いに出して (§5)、スポジチオ論が一般名辞と個別名辞の関係について満足のゆく説明を与えるとし、そのことを示すために三つのスポジチオ (distributa, determinata, discreta) によって命題間の内含の関係を示す図表をつくってみせる。しかし述語と主語の関係を説明する理論としてはムーディも消極的な見方をとる。これに対し、significatio 論から説き起こしてスポジチオ論を包括的に理解し

ようとする (§1) Swiniarski は、この理論を完成させようとは誰もしないであろうけれどもそうすることは不可能ではないとみている。なおこの Swiniarski の論文はニューヨーク州立大学に提出された博士論文 (*Theories of Supposition in Medieval Logic: Their Origin and Their Development from Abelard to Ockham*) の一部である。雑誌に発表された分の構成は次の通りである。

§1: The *Summa Logicae*—Ockham's theory of Signification—Ockham's general theory of Supposition—Ockham's theory of Personal Supposition. §2: The *Tractatus Minor* and the *Elementarium Logicae*. §3: A comparison of Ockham's theory with those of his predecessors. §4: Some contemporary criticisms of Ockham's theory. §5: Summary and conclusion.

FRANZ K. MAYR: Trinität und Familie in *De Trinitate XII*

Revue des études augustiniennes XVIII 1-2, 1972 s. 51-86

中川純男

アウグスティヌスの思想がギリシア哲学、とりわけプラトン、プロティノスの思想の大きな影響のもとにあることはよく知られている。しかしアウグスティヌスがどこまでもキリスト教信仰に立つ思想家であるのに対し、プラトン、プロティノスは彼から見れば異教の哲学者である。彼らの思想はギリシアの神話宗教における宗教体験を背景としている。したがってアウグスティヌスは彼らの思想を受け入れるにあたり、ギリシアの神話宗教、さらにそのヘレニズム化された形態である当時の民間信仰の宗教体験とも出会い、対決せざるをえなかった。この論文は『三位一体論』第12巻に論じられている問題を手がかりに、プラトン、プロティノスを通して伝えられた異教世界の宗教体験がアウグスティヌスの思想にいかなる影響を与えたかを、その積極的側面、否定的側面から明らかにすることを意図している。

ギリシアの神話宗教の歴史は母系中心の (matriarchal) 神々が父系中心の神々に征服され、ついに父なるゼウスの支配する世界へと至る過程であった。この過程に